

明海大学不動産学部

不動産の不思議

第458回

学生たちの視点と発見

【学生の目】

心地よい秋晴れの中、住宅調査のために大学周辺を散策していた。参考にする住宅を探しておもむろに歩き回り、幅員4.5m程の開けた歩道に出た(写真)。興味深

自転車と歩行者の共存

歩道は自転車歩行者道として利用できる。改正道路交通法の「普通自転車の歩道通行に関する規定」(2008年6月施行)により、自転車の歩道通行は、①道路標識等で指定、②13歳未満の児童、幼児および70歳以上の者が運転、③車道や交通

の状況から見てやむを得ない場合に限定された。自転車を車両とする「歩車分離」だが、当然のように自転車が歩道を通行する日本では違和感がある。

車道の一部を青く舗装した自転車通行帯(幅員1.5m以上)や、歩道と車道の間で独立した自転車道(幅員2.0m以上)を設ける例もあるが、整備は一部に留まる。自転車通行帯であっても自転車の車道通

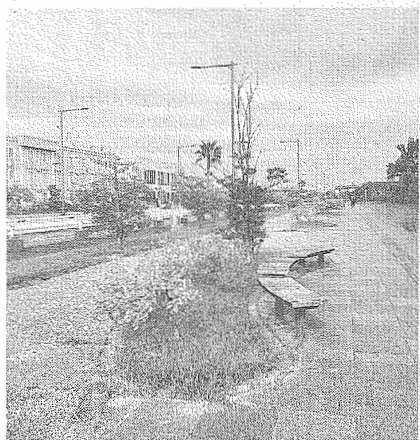
路面仕上げや植栽で工夫

行は危険で、今も多くの自転車が歩道を通行する。

そんな中、①に該当する自転車歩行者道は日本の実態に沿う。一方、歩道内「歩車分離」による歩行者の安全確保が課題だが、この歩道は幅員が広く、歩車共存が可能だ。

次に、路面の仕上げに工夫がある。自転車と歩行者分離の目印として舗装の色やマークの貼り付け、看

板やポールを用いることが多い。この方法は歩道に通常以上の情報があつて煩雑な上に景観を損ねる可能性がある。歩道を自転車が通ることが分かりやすいとしても、優れたデザインとは言い難い。ここでは路面の仕上げを素材から変え、直感的に理解できるデザインとしている。



直感的に理解できるデザインに

アーバンリゾートの雰囲気あふれるホテルや住宅が並ぶエリアだが、柔らかに自然に近い路面の表情は周辺のデザインに調和し、リゾート感を強めている。

更に、ランドスケープに工夫がある。歩道の植栽は珍しくないが、ここでは車道との間に直線状の緑地帯を配置してシャープな印象を与えている。他方、路面の仕上げの区分線は緩やかな曲線にして柔らかさを演出し、曲線の凹んだ部分に丸みを帯びた緑地帯を配置し、人の視線ほど

の高さの木を植えている。緑地帯が利用区分を明確に示す役割を果たしつつ、緑と空を感じる温かさをもたらしている。また、緑地帯沿いに安全に配慮して設置された木のベンチでリゾートらしいゆったりとした時間を過ごすことができる。

【教員のコメント】

前後に子供を乗せて疾走するママチャリは日本独自の風景だ。前提に交通秩序への信頼があり、CO2を出さない点で誇れる。電動アシストの普及で大型化、重量化して存在感が増大するところ、安全に利用できる道路インフラの整備が急務だ。



五十嵐 実菜

不動産学部3年